

ぶらりらいぶらりい

～図書室にはこんな本があります～

No. 37

★ 戦後の娯楽・スポーツの中から昭和館図書室の資料を紹介します。
(書名の後の()の数字は請求記号です。)

問 戦後、女子野球チームがあったがどのようなものだったか。

答 「女子野球」をキーワードとして全ての資料から検索してみます。

例 : 全ての資料 → 全資料・全項目 → 女子野球 (18件該当)
→ 中には映像音響資料(「読売ニュース」)も含まれています。
この資料は、5階映像・音響室でご覧ください。

- ・ 該当資料の中で、詳細な内容(成立・経緯等)があったものは、
『戦後日本のメディア・イベント(1945-1960)』(361.45 Ts36 閉架)
- ・ 当時(昭和26、27年頃)の随筆集の中にあつたものは、
『ふぐ提灯』(914 Ki39 閉架)
- ・ 当時の様子を写真でみることができるものは、
『六年間の記録—終戦から講和まで』(210.76 A79 閉架)
『週刊読売 第11巻76号—80号』(051 Sh99 1953-8 閉架)
* 第11巻76号(昭和28年8月2日)にあります。
- ・ 女子野球選手の採用試験風景やチームのメンバー紹介等の記事のあつたものは、
『野球界 第42巻4号』(783 Y16 42-4 閉架)
『野球界 第44巻6号』(783 Y16 44-6 閉架)
『野球界 第44巻7号』(783 Y16 44-7 閉架)

図書室には、書棚に並んでいる図書以外にもたくさんあります。
検索端末を使って、読みたい本を探してみてください。
操作方法等がわからない場合は、カウンター職員までお気軽に…。

もう一冊の対象は、もちろん本です。世の中には本当に数え切れないほどの本がありますが、どれもこれも誰かが苦労して書いた物に違いありません。考えてみると、ずいぶん長い時間をかけた本もあります。思いつく中で一番の労作は、徳富蘇峰の「近世日本国民史」でしょうか。蘇峰は10代の頃から明治史が書きたかったようですが、ようやく大正七年、56歳のときに書き始めました。無論明治史を書こうとしたのですが、「明治を書くには、その背景を書かなくてはならない」と、結局織田信長時代から書き始めます。そして、明治前史としての江戸時代を書き終わるまでに50巻が費やされます。前書きが50巻ですから大変です。蘇峰は、次いで孝明天皇御宇史11巻を書き、ようやく明治天皇御宇史に入ります。62巻目にして、やっと本題に入ったのです。そして76巻目の函館戦争編を出版して間もなく日本は太平洋戦争に敗れてしまいます。当時蘇峰の原稿は90巻以上の所まで進んでいましたが、終戦直後の情勢は、出版の継続が難しく、77巻の明治政務編を昭和21年に出したところで中断してしまいます。

しばらくして、時事通信社がこの労作を惜しみ、未刊分を纏めて出す計画を立てます。昭和37年、蘇峰は90歳になっていました。時事通信社は、77巻が出ていたことに気が付かず、77巻から100巻までを24冊セットで出しました。実に執筆開始以来45年目の完結です。ただし、内容は明治10年の西南戦争で終わっています。蘇峰は、「明治10年までで39冊を要した国民史をこのまま続ければ、後100巻は必要になる。これでは自分の余命が不足である」として、不本意ながら100巻で切りを付けたのです。恐らく個人の著作として世界最大級の作品と言えます。蘇峰はこの年、最後の随筆「読書90年」を出版しました。日本有数の愛書家にして読書家、徳富蘇峰ならではの本です。筆者の読書人生も、この位欲しいものです。(午睡)



—図書室から—

連日記録更新を続けた暑さも、少しずつ和らいできた気配。蝉から鈴虫へ、そろそろ虫の声もバトンタッチでしょうか？

*開架の資料を増やしています。

手にとって自由に利用できる開架書架の資料の見直しと増加を随時しています。何かご意見がありましたらカウンターまでお願いいたします。

ぶらりらいぶらりい ～図書室にはこんな本があります～ No. 37

2002年8月21日 発行

編集・発行 昭和館 図書室

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1